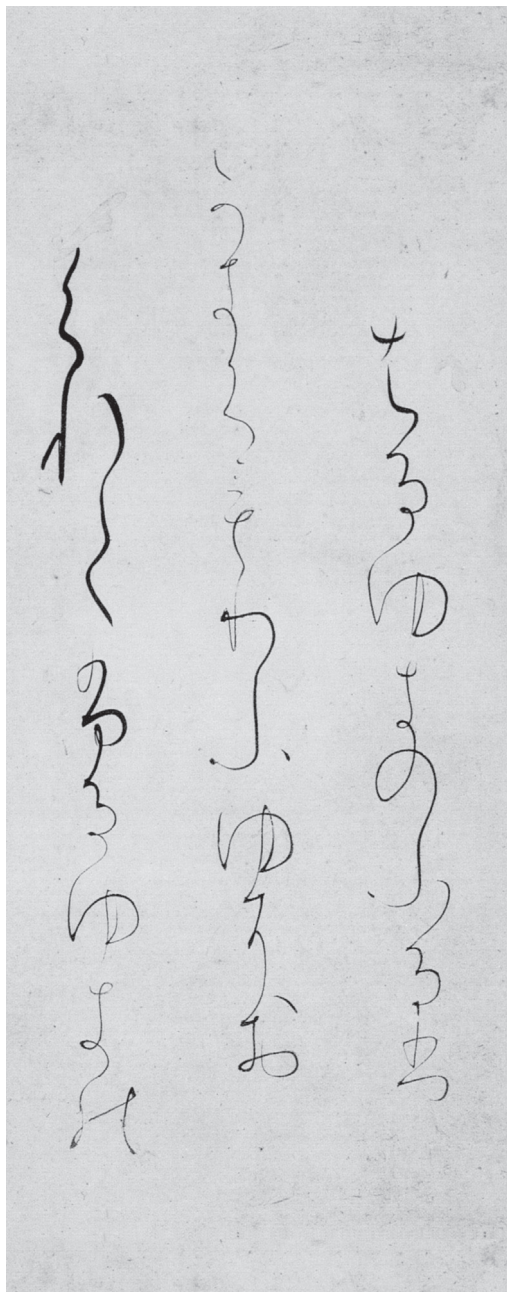


升色紙

昇試随意参考として次の三行を半切に臨書する。



(二玄社)

『^は者るゆ^ま支のふる^ひ悲^ひ ^か可^ま支く毛^り利ふゆ^に耳^におくれ^て写^ぶるゆ^ま支^の能』

一字書 (三月二十二日締切)

課題

碑

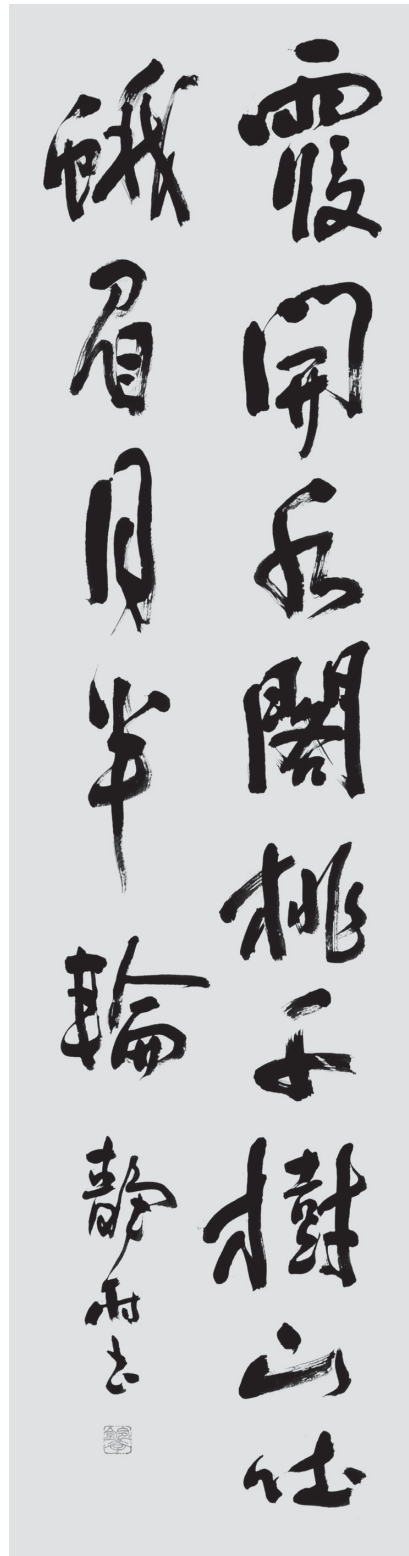
- (1) 書体自由
- (2) 半紙タテ ※ヨコは中止
- (3) 落款は余白に調和を工夫し書き入れる
- (4) 出品料 四四〇円
- (5) バーコード券貼付 太枠内の臨昇の隣空欄に
一字と記入 段級は無記入

半切に収める構成は、自分で考えること。
「〇〇臨」の位置も自分で考えること。

※随意部半紙参考としてもご利用下さい。抜粋可。

A 鈴木静村先生書

霞開水閣桃千樹 山吐蛾眉月半輪 (汪道昆)
 霞は開く水閣桃千樹、山は吐く蛾眉月半輪。



B 高橋香樹会長書

霞「段」部分の書き方字典参照。開 簡略な表出。千 二画目離す。樹 墨継ぎ。末画横画に見えるが、これは点。吐 点はなくても可。蛾 虫の二画目は私のクセ、なくてもよい。月 墨継ぎ。半 縦画の用筆に一工夫を。輪 車偏多様、字典を参照新風を。



画数の多い文字「霞・桃・樹・蛾・輪」と少ない文字「水・千・山・吐・月・半」が混在した課題な為、文字の大小を意識した作とした。「開」の門構えは下スポマリとし、「桃」の木偏は右に傾け、「樹」の木偏は左に傾けました。「樹」と「半」の末筆は長くし変化を。墨継ぎは「千」と「眉」。

訳：水閣に接する千樹の桃は霞をたなびかせて開き、蛾眉に似た半輪の月は山上にさしでている。

予告 (四月二十二日締切) 紅紫渾歸土 芳春難復逢 赤帝擅降火 白雲亂作峰 (正岡子規)

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第一部かな課題

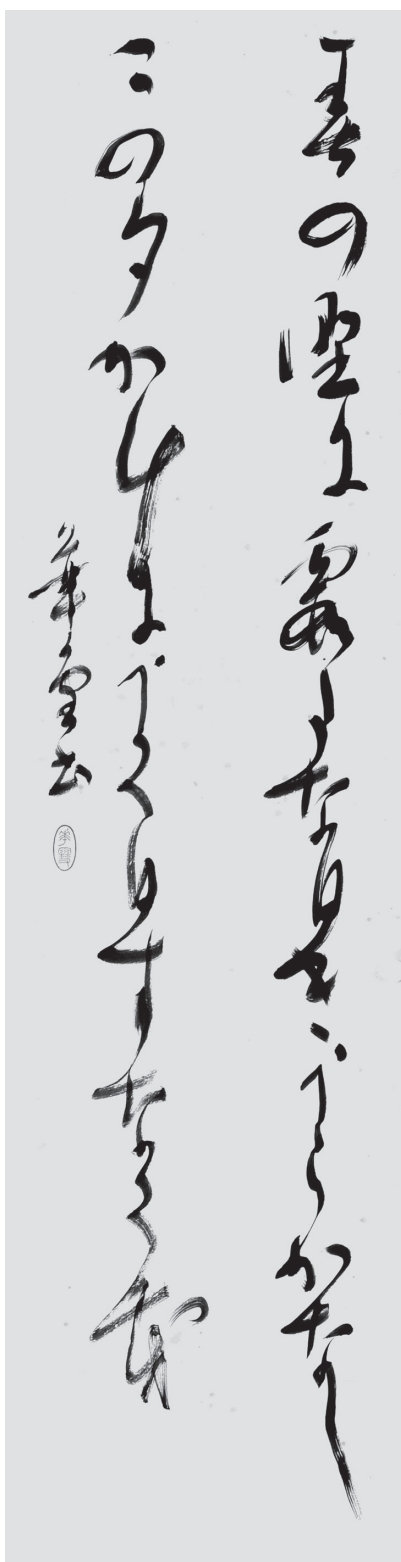
(三月二十二日締切)

A

平岡華雪先生書

春の野に霞たなびきうら悲しこの夕かげに鶯鳴くも(万葉集 大伴家持)
春の野^に霞^たなびき^うらかな^しこの夕^かげに^鶯鳴^くも

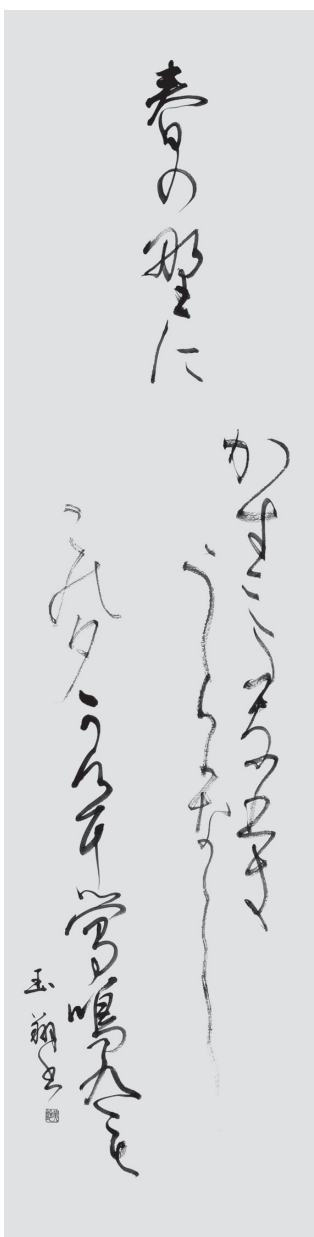
大伴家持



B

福田玉翔先生書

春の野にかす三多奈非支うらかなしこ能夕可介耳鶯鳴九毛



学び方

奈良時代の歌人大伴家持の代表作です。今月も上下二段に配置して、上段はこの短歌の題のような形にまとめました。下段の二行目最終の「し」を思い切り勢いよく流して伸びやかさを求め、下部三行目の墨継はしっかり墨量を足して引き締めました。この形にとらわれずに構成を色々と工夫して、独自の作品を創作してください。

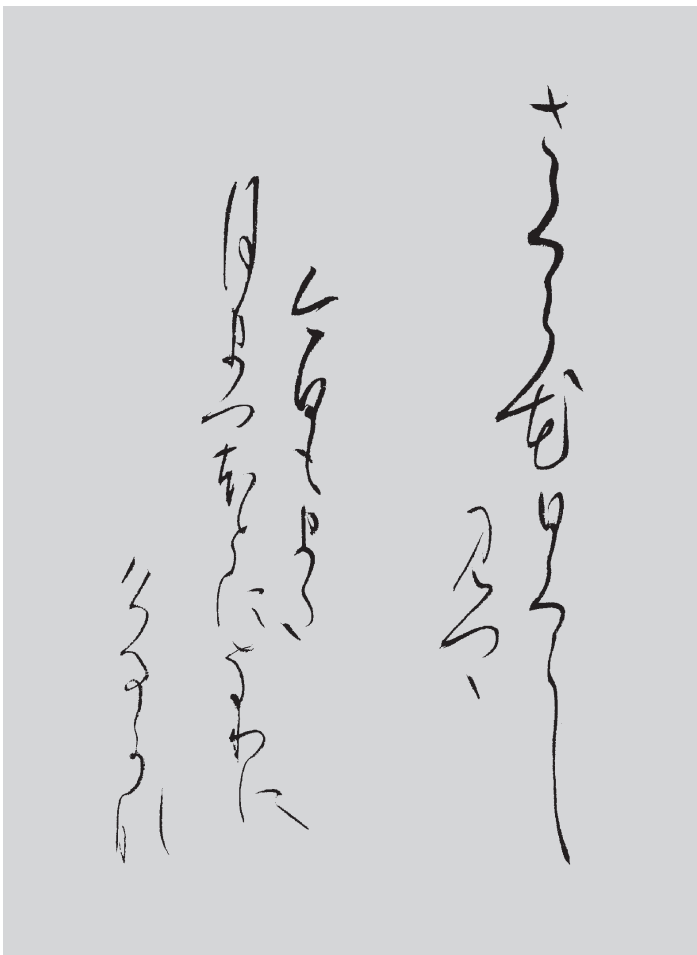
大伴家持は因幡国(今の鳥取県東部)に所縁があります。私事です夫の実家が岡山県と鳥取県の県境で、その辺りをよく訪れました。瀬戸内海側から中国山地を越えて鳥取県に入る分水嶺を過ぎると、突然、家持の世界が展開します。日本海側から中国山地を眺めていると、悲運の家持の心境が思われました。

予告 (四月二十二日締切)

木のもの^このすみ^こか^も今^{いま}は^あれ^ぬべ^し春^はしく^れな^ばた^れか^訪ひ^こん(新古今和歌集 大僧正行尊)

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

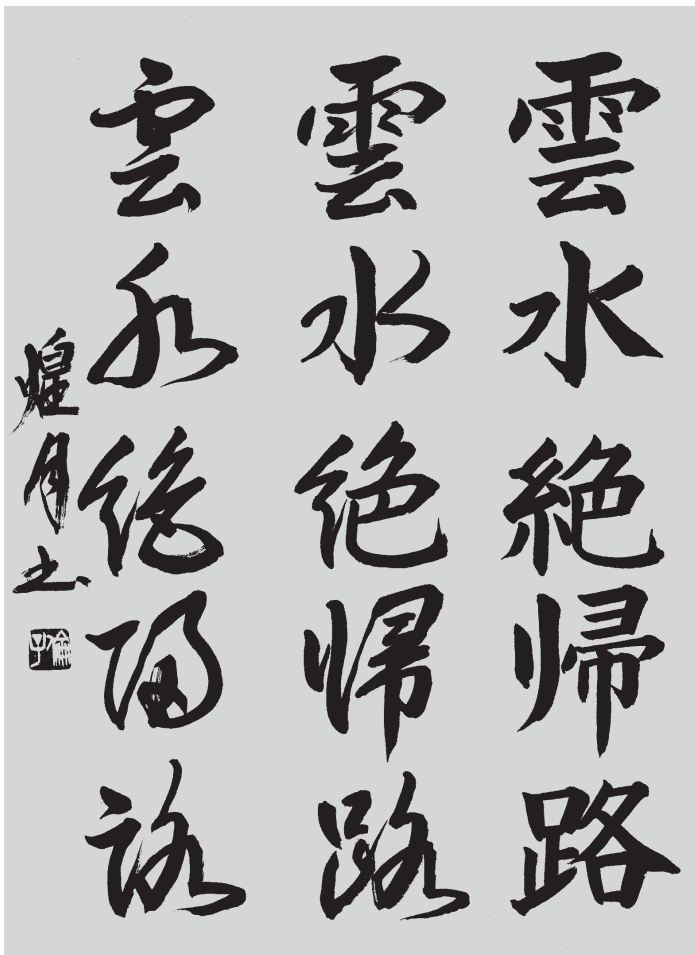
昇試第二部かな課題 (三月二十二日締切)



高塚竹堂先生書

さくら花日ぐらし見つつ今日もまた月まつほどになりけるかな (万代和歌集 橘為仲朝臣)
 さくら花日ぐらし見つ、今日も末多月末つ本とに奈利に介る可那

昇試第二部漢字課題 (三月二十二日締切)



町田煌月先生書

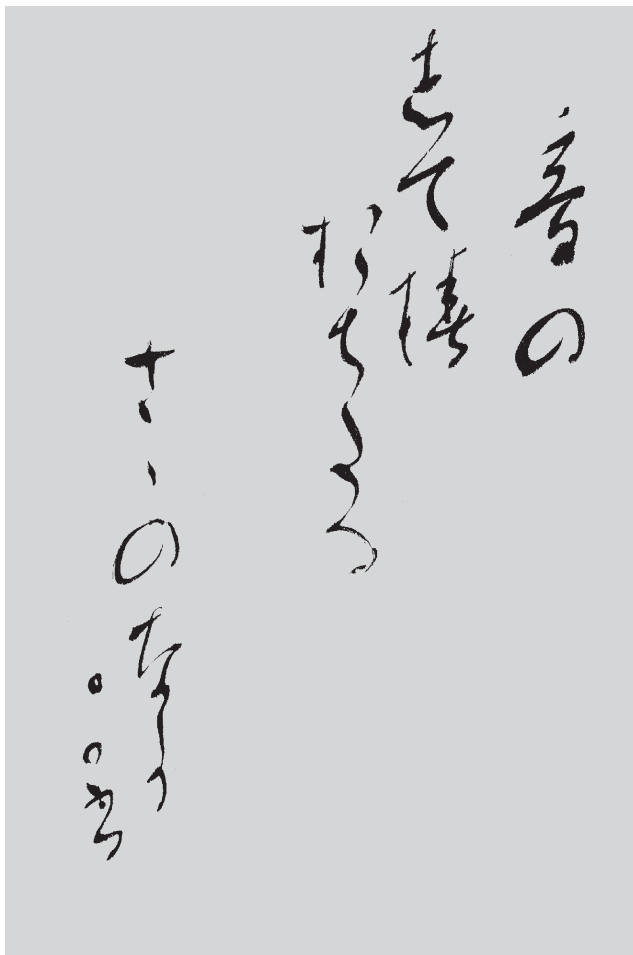
雲水絶歸路 (項斯) 雲水 歸路を絶つ、

訳：雲と水があなたの帰路を絶ってしまった。

※「歸」「帰」どちらでも可。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第三部かな課題 (三月二十二日締切)



昇試第三部漢字課題 (三月二十二日締切)



平岡華雪先生書
詩は會人に向いて吟ず。（中峯広録）
訳：知音にあらざれば語らずの意。会人は我意を会する人。

「會」「吟」の「へ」、この二つの払いが暢びやかに、ゆったりと書く。

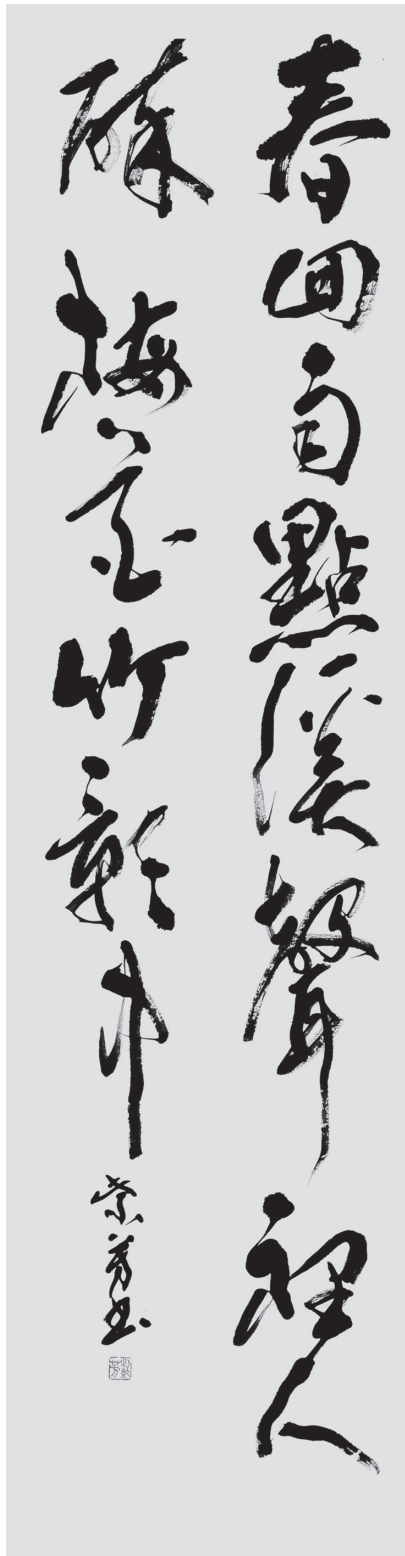


◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇 試 随 意 参 考

高橋紫芳先生書

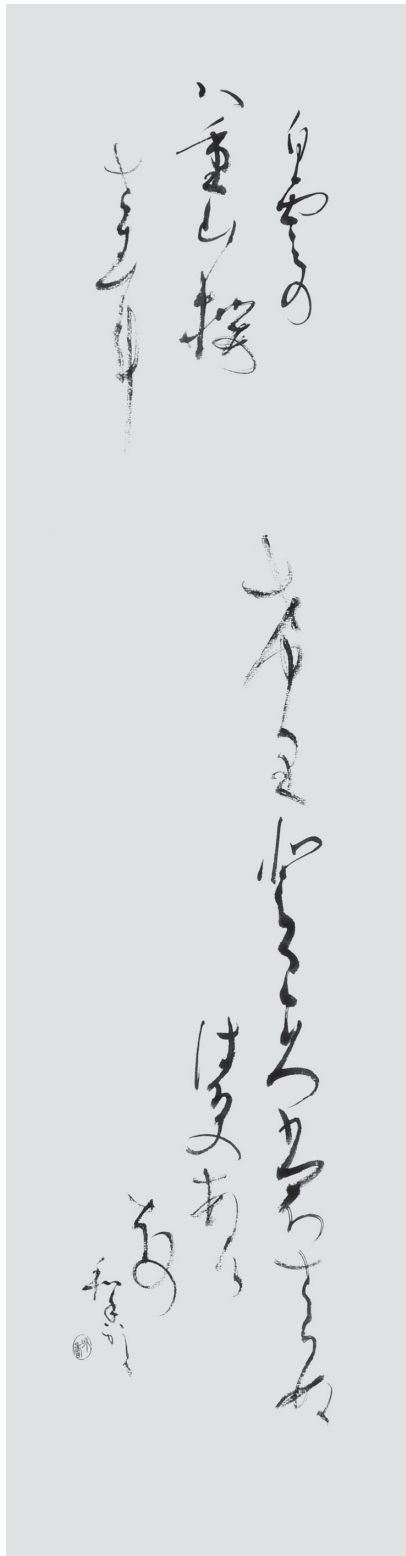
春回雨點溪聲裏(裡) 人醉梅花竹影中(楊誠齋)
春は回る雨点溪声の裏、人は酔う梅花竹影の中。



訳：春はしとしとと雨の降りそそぐ谷川の音の中から来た。人は梅咲き竹のそよぐ中で酒を酌む。

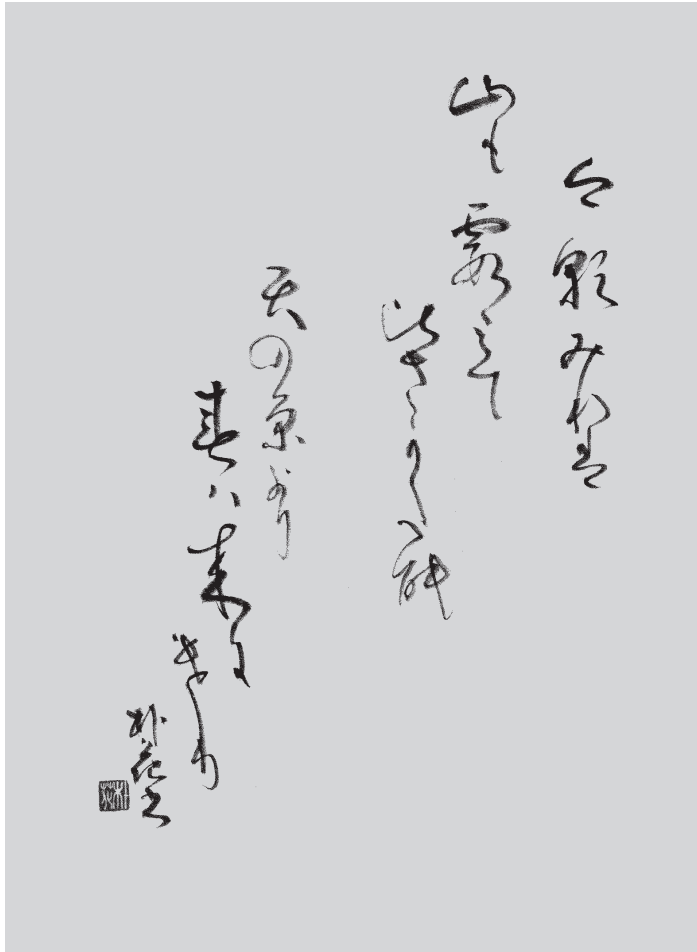
小林和香先生書

白雲の八重山桜さくら咲きにけりところもさらぬ春のあけぼの(藤原公経)
白雲の八重山桜さ支耳希里登ころ裳さらぬはるのあ介本の



◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試随意参考

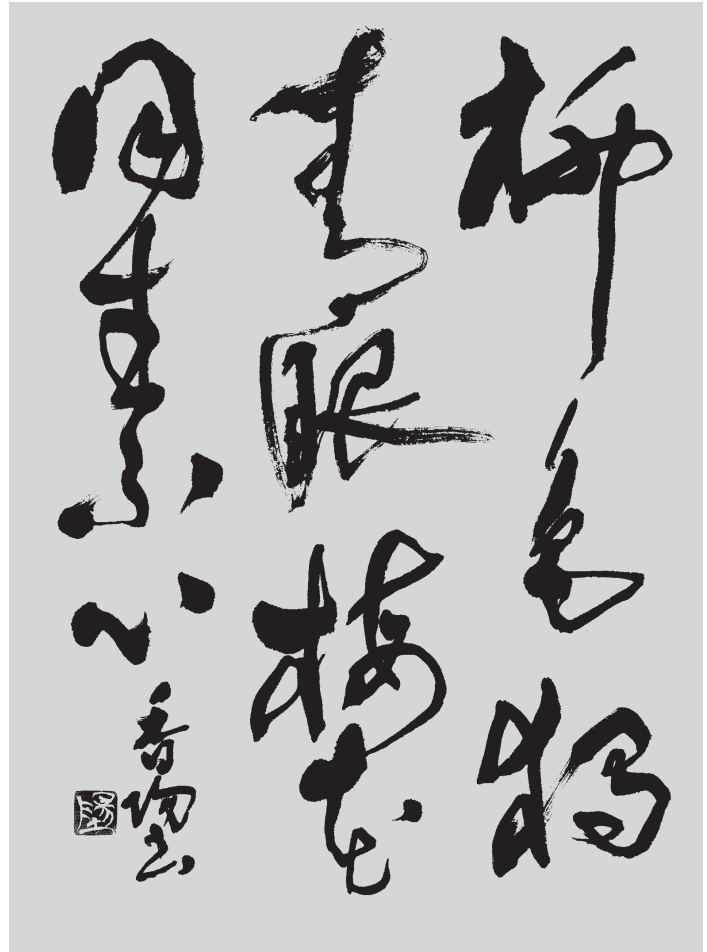


向山朴花先生書

今朝みれば山も霞みてひさかたの天の原より春は来にけり (源実朝)
 今朝みれば山も霞みてひさかたの天の原より春は来にけり (源実朝)
 今朝みれば山も霞みてひさかたの天の原より春は来にけり (源実朝)

訳：柳の色がひとりたのしげに青々として葉が伸び、梅の花は白くて潔白な心のようなのである。

昇試随意参考



福田香陽先生書

柳色独青眼 梅花同素心 (黄庚)
 柳色独青眼 梅花同素心 (黄庚)
 柳色独青眼 梅花同素心 (黄庚)

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

硬筆部課題参考

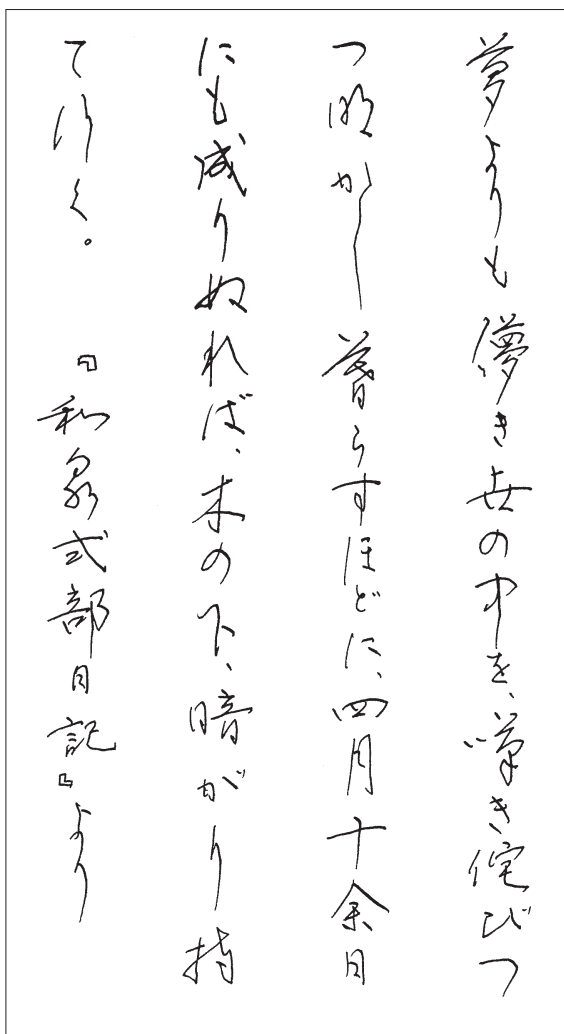
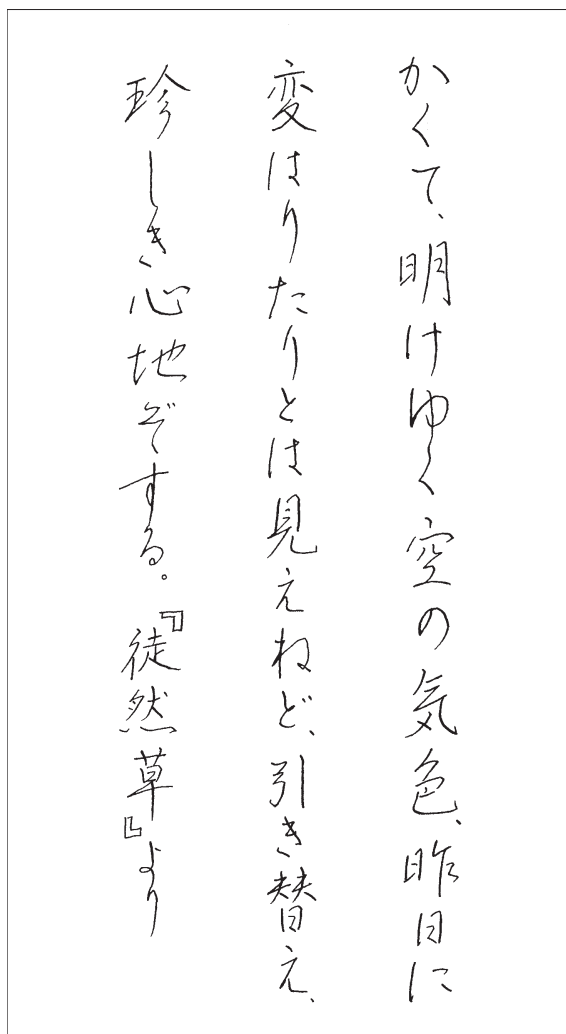
(三月二十二日締切)

湯澤春翠先生書

石原春香先生書

課題2 (初段階以下)

課題1 (初段階以上)



課題2 (初段階以下)
かくて、明けゆく空の気色、昨日に変はりたりとは見えねど、引き替え、珍しき心地ぞする。『徒然草』より
(吉田兼好)
(出典も課題に含みます)

- ◆注意
- (1) 自分の段級に合った課題を選択。
 - (2) ペンまたはボールペン(黒色)を使用のこと。青インクは不可。
 - (3) 段級欄は本人が記入(色は黒)はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位)に次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新
 - (4) 会員は無料・会員外は四六〇円
 - (5) 会員は無料・会員外は四六〇円

課題1 (初段階以上)
夢よりも儚き世の中を、嘆き詫びつ、つ明かし暮らすほどに、四月十余日にも成りぬれば、木の下、暗がり持て行く。『和泉式部日記』より
(出典も課題に含みます)